

OS SCREEN

1953年

オーエスの歴史がはじまった

オーエスのルーツは1953年までさかのぼります。
大阪府堺市に創立し、映画館のスクリーン製造、販売、
施工からはじまりました。

2000年

ホームシアターの夜明け

OS SCREENの第一歩はここから始まります。
第一号モデルはそれまでの塩ビを使ったスクリーンからの
脱却を図るファブリックスクリーン「ピュアマット」です。

OS SCREENの登場が、 ホームシアターの夜明けを告げた。

ピュアマットは裏・表の織り方の異なる2層を同時に織り上げるオーエス独自の織物です。経・緯の糸をランダムに織り上げた不規則な折り目は、プロジェクターの大敵である「モアレ」を防ぐ、強力な武器となりました。ピュアマットはプロジェクターのデジタル化の波にマッチして非常に高い評価を得ることとなりました。

ファブリックのもたらす効果として、ナチュラルで落ち着いた映像の再現を可能にしたのです。それまでのスクリーンは、プロジェクターの明るさを補う、高ゲインを求められるものでした。ピュアマットはそこにピュアな映像を楽しむ文化を提案したのです。

以来、ピュアマットのコンセプトは**何も足さない、何も引かない**。プロジェクターの特徴をそのまま素直に紡ぎだすスクリーンであること、これが他の追随を許さないOS SCREENなのです。

ピュアマットの登場は、同時に日本のホームシアターの夜明けでもあります。



2005年雑誌広告 ピュアマットの第一号広告

厳重な検品項目が裏付けられる
オーエス

↑買替用のスクリーン天吊り可能なエクステンションポール (¥11,500/1本)。サイズの特別注文も可能

↑「スーパー-HiViCAST」の「70.Various Color Material II」より、カラー(色の濃さ)はシネマモードの初期値では「10」だったが、そのままでほとんど「霞い」印象もあった

↑「スーパー-HiViCAST」の「70.Various Color Material II」より、カラー(色の濃さ)はシネマモードの初期値では「10」まで上げてみた。本機のカラー調整は色の透明感を保ったまま濃くなる傾向だったので、これでも絵がもっとりなることはない

↑「スーパー-HiViCAST」の「70.Various Color Material II」より、カラー(色の濃さ)はシネマモードの初期値では「10」まで上げてみた。本機のカラー調整は色の透明感を保ったまま濃くなる傾向だったので、これでも絵がもっとりなることはない

↑「スーパー-HiViCAST」の「70.Various Color Material II」より、カラー(色の濃さ)はシネマモードの初期値では「10」まで上げてみた。本機のカラー調整は色の透明感を保ったまま濃くなる傾向だったので、これでも絵がもっとりなることはない

2006年8月号 HiVi誌 (ステレオサウンド)
オーエスプラス e は機会があるごとに、ホームシアターにおけるスクリーンの重要性を啓蒙してきました。そのため現在 OS SCREEN はリファレンススクリーンとして、様々な試写室で映像評価に活躍しています。

DLPの光のパワーとピュアマットII EXで
コントラスト感豊かな絵を引きだそう

↑「スーパー-HiViCAST」の「70.Various Color Material II」より、カラー(色の濃さ)はシネマモードの初期値では「10」だったが、そのままでほとんど「霞い」印象もあった

↑「スーパー-HiViCAST」の「70.Various Color Material II」より、カラー(色の濃さ)はシネマモードの初期値では「10」まで上げてみた。本機のカラー調整は色の透明感を保ったまま濃くなる傾向だったので、これでも絵がもっとりなることはない

↑「スーパー-HiViCAST」の「70.Various Color Material II」より、カラー(色の濃さ)はシネマモードの初期値では「10」まで上げてみた。本機のカラー調整は色の透明感を保ったまま濃くなる傾向だったので、これでも絵がもっとりなることはない

2012年6月号 HiVi誌 (ステレオサウンド)
ピュアマットII EXは、FHD対応のピュアマットの最高峰です。その技術は現在のピュアマット 204に引き継がれています。

プロジェクターの高輝度化 ピュアマット II・II plus (WF201、202)

ピュアマットの登場は、完全拡散型のスクリーンの価値を高めました。またさらなる研究開発により、光の透過損失がなく、安定したゲインを確保するバックコーティング技術を開発し、FHD (1080p) の解像度にも対応するスクリーンとしてピュアマット II・II plus が誕生しました。(2002年2月)

プロジェクターの光源も明るさを増し、ビーズやパールなどでプロジェクターの光量をカバーするという使われ方もほとんどなくなり、リファレンススクリーンとしての評価を高めました。2010年に誕生したピュアマット II EX (WF203) は、フルHD (1080p) プロジェクターの登場に合わせ、最もふさわしいスクリーンとして愛好者が増えました。

4Kの登場 ピュアマット III・III Cinema (WF301、302)

2011年世界初のホームシアター向け4Kプロジェクターの登場は、スクリーンのモアレの問題以外に、画素が見えないのにスクリーン表面の凹凸(エンボス)が見えるという新たな課題を生み出しました。プロジェクターの画像処理技術が進み「何も足さない、何も引かない」という「ピュアマット」のコンセプトは、4Kの高画素になってさらに重要になりました。ピュアマットの特徴を維持したまま糸の太さを変え、織り目を小さくするという新たな技術で、滑らかな幕面が特長のピュアマット III (WF301) を2013年に生み出しました。4Kとの相性が非常に良く、更なる開発による新たなコーティング技術は、2014年ピュアマット III Cinema (WF302) として電動巻取り型スクリーンへの搭載として結実しました。

WF302は、ゲイン1.0の完全拡散型の最高級スクリーンとしてお勧めしています。

HDR技術の登場 レイロドル (HF102)

人間の目に見える感覚に映像処理技術も近づけようというHDR(ハイ・ダイナミック・レンジ)は、技術紹介されるや否やあつという間にフラットディスプレイに搭載され、プロジェクターにも次々に新技術が導入されるようになりました。するとゲイン1.0のWF302では階調域が物足りず、プロジェクターの明るさを補填したい、と開発されたのがレイロドル(HF102)です。(詳細はP.7をご覧ください)

ピュアマットに代表される OS SCREEN は、プロジェクターの歴史とともに歩み、スクリーンシアターをお楽しみいただいている全ての方のために開発を続けています。



2012年



2013年



2016年

HiVi
2017
Grand Prix

その進化とともに毎年各種の AV アワードを受賞しています。

2002年ピュアマット II、2003年ピュアマット II Plus、2013年ピュアマット III Cinema、2017年レイロドルが HiVi グランプリなど様々なアワードを受賞しています。特にレイロドルは他に類を見ない第4の生地特性であり、HDR プロジェクター用のスクリーンとして多くの評論家諸氏のご賛同をいただきました。

代表的なアワード



レイロドル
REIRODORU(レイロドル・生地型 HF102)は、近日発売予定です。

HDR 適合スクリーン「レイロドル」誕生

人間の瞳の持つ「電算を識別する能力」にできるだけ近づける、それが HDR (ハイ・ダイナミック・レンジ) 技術です。「レイロドル」は、従来の拡散型ピュアマット III Cinema の10倍のコントラスト比を実現、しかもホットスポットを除去、反射型と拡散型の特質も兼ねた、HDR 対応プロジェクターに適合する第4の画質「広階調型」HDR スクリーンです。

2017年